

2国の作家が描く「怪談」

27日から松江・小泉八雲記念館

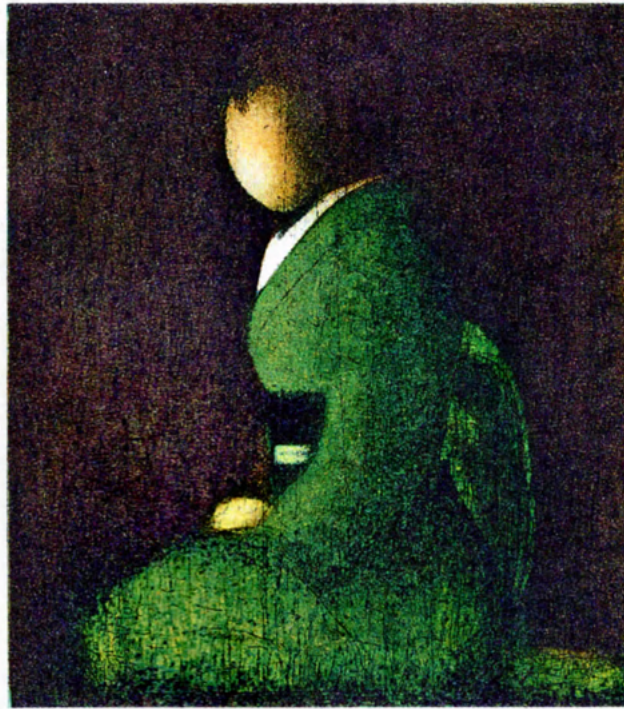
松江ゆかりの文豪・小泉八雲（ラフカディオ・ハーン、1850～1904年）が幼少期を過ごしたアイルランドの芸術グループが、27日から松江市奥谷町の小泉八雲記念館でアート展を開く。同国の作家が記念館に提案し実現。日本側を含む総勢40人が、代表作「怪談」をテーマに版画や写真を出展する予定で、記念館関係者は八雲への関心の高まりを喜ぶ。

（片山皓平）

アイルランド側から提案

八雲はギリシャ生まれで、2歳から13歳まで父親の実家があるアイルランドで暮らした。両親の離婚、大叔母の破産などに苦しむ一方、文化への興味、霊的なものへの関心を高めた。来日後の執筆活動の土台となり、異文化を積極的に受け入れる「開かれた精神」を尊重する思想とともに、後に影響を与えた。

9月24日までの小泉八雲記念館関係者を中心に2泊3日のアート展を皮切りに国内5カ所を巡回。2009年、アート展やシンポジウムなどを通して八雲の精神を発信するプロジェクトを開始。19年まで続き、各国の作家がさまざまな作品を出展してきた。八雲に対する関心の輪が広がり、今回はアイルランドの作家でつくる「ブルー・ムーン・プロジェクト」が記念館に開催を提案した。



ブルー・ムーン・プロジェクトのステイファン・ローラー代表の作品「お女中（むじな）」



出展者のニール・ネセンズ氏の作品「乳母桜、西法寺の庭」

りに国内5カ所を巡回。2009年、アート展やシンポジウムなどを通して八雲の精神を発信するプロジェクトを開始。19年まで続き、各国の作家がさまざまな作品を出展してきた。八雲に対する関心の輪が広がり、今回はアイルランドの作家でつくる「ブルー・ムーン・プロジェクト」が記念館に開催を提案した。

9月24日までの小泉八雲記念館関係者を中心に2泊3日のアート展を皮切りに国内5カ所を巡回。2009年、アート展やシンポジウムなどを通して八雲の精神を発信するプロジェクトを開始。19年まで続き、各国の作家がさまざまな作品を出展してきた。八雲に対する関心の輪が広がり、今回はアイルランドの作家でつくる「ブルー・ムーン・プロジェクト」が記念館に開催を提案した。

「八雲の考え方が現代社会でも生きると多くの人が気付き始めている」と話す。企画を担当する小泉祥子学芸企画ディレクターは「アイルランド側からの提案はこれまでになかった」と驚きつつ、「現代アートを通じて両国の文化交流をさらに盛り上げたい」と話した。

「八雲の考え方が現代社会でも生きると多くの人が気付き始めている」と話す。企画を担当する小泉祥子学芸企画ディレクターは「アイルランド側からの提案はこれまでになかった」と驚きつつ、「現代アートを通じて両国の文化交流をさらに盛り上げたい」と話した。